

原爆文学研究会報

第六四号

原爆文学研究会三〇二一年一二月

原爆文学研究会との出会い

アン・シエリフ

私が原爆文学研究会を初めて知ったのは、もう十年前になります。二〇一一年頃に広島ジャーナリストの紹介で川口隆行さんにお目にかかり、二〇一二年の七月の会の情報をいただき、やがて会に参加するようになりました。そして『原爆文学研究』の当時の最新号もいただきました。論文に夢中になって、裏表紙の白黒の一本の木の写真も見たいものの、広島・長崎育ちの人間ではありませんので、なぜ木の映像が載っているか不思議に思いました。

一人の北米人として原爆文学を冷戦文化と権力関係の観点から問うという研究経歴を持っていた私は、この十年間、原爆文学研究会の機関誌と会の参加を通して文学以外の他分野の知識を得ることも、そして日本国内外の研究者と市民との交流を深めることもでき、自身の研究を多角的な視点で考えることができるようになりました。特に原文研の研究動向の一つとして「テキスト・言説が生産される場」で繰り広げられる「闘争への関心」というのも、この十年『原爆文学研究』で読ませていただき、おおいに刺激を受けてきました¹。考えてみれば、今関わっている戦後文化運動のサークル史のプロジェクトも、平岡敬・四國五郎・山口勇子を中心に Three Witnesses の研究のテーマなどを知ることができたのは、こうしたことがきっかけでした。

今はパンデミックによる外国人の入国制限のため日本に行けませんの

で、このごろは大事に取ってある何冊かの『原爆文学研究』の論文を読み返したりしています。太平洋を渡ってアメリカ大陸横断でやっと届いたこの出版物『原爆文学研究』の裏表紙の長崎の被爆樹木の写真も、気になっていました。以前、私は『原爆文学研究』で毎回同じ写真が繰り返し利用されていると思っていたのに、今度初めて、号によって違うことに気がつきました。当たり前のことでは見落としやすいのでしょうか。木は人間同様生き物で、成長もします。どこの木だろうかと、裏表紙の見返しをよく見てみると、その被爆樹木の由来のことも、原爆文学研究会の発足後、長崎市山王神社からいただいた被爆くすの木2世の説明も、その「わずか10cmくらい」だった苗木が「7年半後の現在も」「10年半後の現在も」「17年半後の現在も」「力強く育ち続けて」いるということも小さな文字で書いてあります。

印象に残るのは、原文研を長い間支えてきた多くの方の一人が毎年同じ位置からその被爆樹木を大事に撮影されたことです。会員が変わっても、歴史的状況や世代交代で会そのものが変化しても、力強く生きていく何かが残ります。しかし、この被爆樹木の写真は平和のメッカのヒロシマで利用されそうな単純なシンボルにすぎないのでしょうか。それとも、核兵器・原発・核の時代の言説の生産の場という可能性もあり得るのでしょうか。

広島でアジア太平洋戦争の戦争中に原爆投下を体験した沼田鈴子が、戦争と暴力のことを次の世代に伝える責任、そしてお互いの歴史を知る責任があるという信念から、自分の戦争体験を語る場所に原爆投下を生

き残った広島のアオギリの木を選んだそうです。沼田は原爆の記憶を語る際、破壊と再生、暴力と正義、絶望と希望、生命力といった被爆樹木の象徴的な意味と説得力のある物語を巧みに作り、聞き手にアピールしたと言えるでしょう。『原爆文学研究』の表紙の被爆樹木の写真も同じく、希望を与えてくれる意味で毎回載せているような気がします。

核兵器と戦争の恐ろしさを言う人間がいなくなっていけば、「物言わぬ」被爆樹木と広島文学資料保全の会の一所懸命の努力のお陰で残った原爆文学の原稿、日記などの肉筆資料、被服支廠キャンペーンの保存と活用の対象となっている戦争を支えた工場の旧広島陸軍被服支廠の巨大なレンガの被爆建物といったモノは、全て次世代に受け継いでいく価値があります。と同時に、研究者と市民の責任はそういう何も言えないモノの物語と歴史背景を研究し、多言語で語り続けることなのではないでしょうか。

原爆文学研究会の方に巡り合えたのは、今から考えると、これは尋常なことではなかったと思っています。

- (1) 「戦後70年」連続ワークショップ、『原爆文学研究』14号(二〇一五年)、245～246頁。
- (2) 米山リサ『広島・記憶のポリティクス』岩波書店、二〇〇五年。
- (3) 二〇一五年に私が勤めているアメリカの中西部の大学は、グリーンレガシーヒロシマという広島市の団体のパートナーになり、広島市の被爆樹木の種をいただきます。このみどりの友好関係により、現在、広島市縮景園の銀杏の被爆樹木の2世は大学の校内に育っています。アメリカでも、広島市の被爆樹木は原爆を語る場にもなっています。

第六四回 原爆文学研究会報告



第六四回の原爆文学研究会は、二〇二一年九月一八日(土)、午前から夕方まで開催されました。第六一回から四回続けての、オンラインでの開催でしたが、遠方からの参加者も多く、いつも通り活発な議論となりました。

今回は、午前中に大江健三郎『ヒロシマ・ノート』の再読企画、休憩を挟んで、午後から研究発表二本という内容でした。『ヒロシマ・ノート』は以前から再読の候補作品に挙がっていました。が、「いよいよ来たか」と思われた方も多いのでは。

まずは楠田剛士さんから『ヒロシマ・ノート』の書誌情報、そして『世界』初出と岩波新書版との異同、さらに先行研究の流れについて詳しい説明がありました。次に高橋由貴さんが、大江にとって『ヒロシマ・ノート』がどのような土台となって、その後の文学活動が形作られていったのか、大江自身の『ヒロ

シマ・ノート』に対する批判的な意識を読み取りつつ分析がなされました。最後に、山本昭宏さんが『ヒロシマ・ノート』を取り巻く状況を考察されました。一九六三年の広島訪問以前に大江が広島に言及した例を細かく辿り、『ヒロシマ・ノート』と微妙に異なる点を指摘した上で、その変化の背景に長男の誕生と、原水爆禁止運動の分裂といった事情を読み取る内容でした。詳細はこの後の発表要旨および『原爆文学研究』第20号をご覧いただきたいのですが、今回のお三方の報告およびその後活発な質疑応答を通して、この作品を捉える論点の多様さに、あらためて気付かされました。

研究発表の一本目は榎本由貴さんの「俳句における原爆遺構——長崎・浦上原爆を中心に——」で、原爆遺構を詠んだ俳句に関する考察で、特に水原秋櫻子が浦上を詠んだ句について、「聖廃墟」という語の用いられ方を細かく辿った興味深い内容でした。第六一回研究会でのワークショップ「震災」と俳句」（『原爆文学研究』第19号に収録）でも榎本さんは登壇し、俳句研究のメソッドを示してくれましたが、今回も語の細部にこだわる繊細な読みを披露されました。

研究発表の二つ目は、堀本嘉子さんの「戦後国語教科書における「原爆文学」——中学校用教科書をめぐって——」でした。実際に中学校で教壇に立つ堀本さんは、教育現場での原爆教材のあり方に以前から関心を持っておられ、今回も学習指導要領の改定に伴う国語教育の変化に関する強い問題意識を感じさせる内容でした。

◇「原爆文学」再読8——大江健三郎『ヒロシマ・ノート』

大江健三郎『ヒロシマ・ノート』

再読のためのノート

楠田剛士

『ヒロシマ・ノート』の初出は「広島 一九六三年夏」（『世界』一九六三・一〇）、「ヒロシマ・ノートⅠ 広島再訪」（『世界』一九六四・一〇）、「ヒロシマ・ノートⅡ モリストの広島」（『世界』一九六四・一一）、「ヒロシマ・ノートⅢ 人間の威厳について」（『世界』一九六四・一二）、「ヒロシマ・ノートⅣ 屈服しない人々」（『世界』一九六五・一）、「ヒロシマ・ノートⅤ ひとりの正統的な人間」（『世界』一九六五・二）、「ヒロシマ・ノートⅥ 最終回 広島へのさまざまな旅」（『世界』一九六五・三）であり、初出を加筆修正したものが初刊（岩波新書、一九六五・六）である。『大江健三郎同時代論集2 ヒロシマの光』（岩波書店、一九八〇・一一）、『日本の原爆文学9 大江健三郎／金井利博』（ほるぷ出版、一九八三・八）に再録されたが、前者には若干の本文異同が見られる。池澤夏樹編『日本文学全集 大江健三郎』（河出書房新社、二〇一五・六）には「人間の尊厳について」が再録された。岩波新書は一九九五年六〇刷の時点で差別用語などに関して訂正された。電子版が二〇一九年一〇月から配信され、書籍版は二〇二一年九月の第九六刷から改版された。

先行論については、大江の作家活動のなかでの意味づけを行う論文がもつとも多い。(1) 客観的なルポルタージュとしてより、作家のドキュメントとしてとらえるもの（政治性の弱さ・不徹底を見るか、作家的成長を見るか）。(2) 同時期の小説作品『個人的な体験』『空の怪物アグイー』『アトミック・エイジの守護神』との関連性を指摘するもの。(3) 先行するルポルタージュ『世界の若者たち』（一九六二）、『ヨーロッパの声・

僕自身の声』(一九六二)との関連性を見るもの。(4)その後の『沖繩ノート』との関連性に注目するもの(継続・発展と見るか、パターン化と見るか)。(5)その他の大江作品と比較検討するもの。(6)思想的背景を検討するもの(実存主義、ユマニスム)などがある。大江と同時代の政治的文脈との関わりに注目する論文は、(7)ナシヨナリズムの問題、(8)ナシヨナルな語りのずらしを分析する。大江以外の作品比較として、(9)山代巴編『この世界の片隅で』(一九六五)、石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』(一九六九)などの記録を含む文章と、(10)丸木位里・赤松俊子『ピカドン』(一九五〇)、土門拳『ヒロシマ』(一九五八)、川田喜久治『地図』(一九六五)などの視覚表現に注目する論文がある。

◇『原爆文学』再読8―大江健三郎『ヒロシマ・ノート』

大江健三郎の「ヒロシマ」を語るスタイル

――『ヒロシマ・ノート』から『ヒロシマの生命の木』へ――

高橋由貴

最も『ヒロシマ・ノート』を読み直し発言しているのが大江健三郎本人でないか? ――このような問いから、今回の発表では、『ヒロシマ・ノート』を起点にし、そこから二五年後に作られたTVDキュメンタリー「世界はヒロシマを覚えているか」(一九九〇年)およびそのフィルムドキュメント『ヒロシマと「生命の木」』(日本放送出版協会、一九九一年)、さらに「半世紀後の『ヒロシマ・ノート』」(早稲田文学 二〇一五年秋号 広島について、いろんなひとに聞いてみた)、二〇一五年一〇月)を扱い、大江が「ヒロシマ」を語るスタイルについて検討した。ヨーロッパ

パ訪問と旅行記『ヨーロッパの声・僕自身の声』を経て、『ヒロシマ・ノート』は〈世界〉との対話が意識されていたはずである。その後の文学的営為を考えると、『ヒロシマ・ノート』(と『個人的な体験』)における翻訳可能性、つまり、あらかじめ世界に翻訳されるテクストであることを意識しながら「日本語の作家」「日本語の文学」であることを意識する転換点としてこの一冊が重要であると考えたい。

『ヒロシマ・ノート』で度々用いられる「モラリスト」は、ノーベル文学賞受賞スピーチでも大江文学のキー概念として言及されているが、一九八〇年代以降「ヒロシマ」を語る際には、サイドの「知識人」という語が強く押し出されている。また、「ヒロシマ」を語る際に、旅先(主に海外)と自宅書棚前という固定された場所でのポートレートが添えられている。『ヒロシマ・ノート』では、今回の取材が、自分の目でものを眺め、広島の人間を「ユマニスト」として見出す旅であると位置づけられていた。『ヒロシマの「生命の木」』では、被爆者ではなく、世界で核をめぐる「仕事」をする人間との対談・対話として構成されている。「生命の木」は「ノート」とは少し異なる(同じ「自分の目で世の中を眺める眼を持つ点は同じであるが、それが「ユマニスト」から「知識人」に焦点が移る)意味で、〈見られる自分(客体としての作家)／見る自分(主体としての作家)〉の二重性が文体や文章のスタイルに関わっている。添付された写真からも、このような〈見られる／見る〉作家像が意識されている。

さらに「核の荒地」から「生命」を象徴する「緑の木」という対比的かつ象徴的な文学イメージが『ヒロシマの「生命の木」』前後から形成されている。エリオットやオーデンの大戦後文学を引き継ぎながら、核戦争や核汚染という暴力を加味することで、より科学と宗教性を帯びた「荒地」のイメージが強められる。他方、原民喜ら原爆文学と、「雨の木」のような宇宙樹から郷里の「森」という土着性(農本主義や民俗学)も取り込むスケールで、「緑」の「生命の木」が大江において構想される。

これらが九〇年代の大江小説（『治療塔』『治療塔惑星』）『燃えあがる緑の木』（三部作）に繋がっていくのだと考える。

◇「原爆文学」再読⑧—大江健三郎『ヒロシマ・ノート』

『ヒロシマ・ノート』を読み直すために

（外在的要素に注目して）

山本昭宏

岩波新書にまとめられた『ヒロシマ・ノート』の構成を確認すると、プロローグのあとに置かれた「広島への最初の旅」という章が目につく。この章は、初出時には「広島 一九六三年夏」というタイトルで、『世界』一九六三年一〇月号に掲載されたものだった。

そもそも、大江が広島を訪れたのは一九六三年が初めてではない。一九六〇年に「若い日本の会」のメンバーとして広島を訪れていた。『ヒロシマ・ノート』の「広島への最初の旅」という章タイトルは、改めて広島に向き合うために認識を再出発させる契機になった旅という意味で「最初」と名付けたのだろうか。では、一九六〇年の時点での大江の認識と、『ヒロシマ・ノート』に収録された一九六三から六四年にかけての認識とでは、どこが同じで、どこが違うのだろうか。

それを確認するために、本報告では、まず一九六〇年夏の『中国新聞』から、大江の足取りと発言を追った。そこから、大江の認識を取り出し、『ヒロシマ・ノート』と比較するという作業を行った。その結果は、従来指摘されている指摘をなぞるものになった。つまり、第一に長男の出生、第二に政党主導の運動への拒否感。これら二点が、大江に認識の転換をもたらしたと考えられてきたし、報告でもそれを再確認した。本

報告の独自性は、一九六〇年の大江らの広島訪問が、『中国新聞』でいかに報じられたかの調査にあったと言えよう。なお、『中国新聞』の調査にあたっては、中国新聞社論説委員室の宮崎智三さんにご助力を仰いだ。宮崎さんにはお礼申し上げます。

加えて、報告では、同時代の総合雑誌を調査して、大江の『世界』連載の量的インパクトも指摘した。つまり、同時代の総合雑誌で、広島に焦点を絞ったルポルタージュの連載は他には存在せず、大江と編集者・安江良介の試みが類例のないものだったということを確認できた。また、雑誌『世界』内部の他の広島関連の記事のなかで、大江の取り組みが言及されるという例があった。『世界』および岩波書店の編集姿勢のなかに大江の取り組みを置き直し、そのアクチュアリティを考察する試みを、今後も続けていきたい。

◇研究発表1

俳句における原爆遺構

——長崎・浦上原爆を中心に——

榎本由貴

俳人・水原秋櫻子は、北原白秋の『邪宗門』（易風社、一九〇九）などに触れ、長崎の俳句会の句作指導を行っていたことを直接の理由として、一九三〇年代から南蛮文化に憧憬していた。長崎が原爆投下によって被爆地となった後の一九五二年、念願叶って長崎を含む九州へ旅行することになった。この旅を経て、水原秋櫻子は第一三句集『残鐘』の表題句〈鐘楼落ち麦秋に鐘を残しける〉や、浦上天主堂を「聖廢墟」と言い換えたことが特徴の〈麦秋の中なるが悲し聖廢墟〉を得ている（初出：

『馬酔木』（馬酔木発行所、一九五二・八）。

本発表の目的は、この句集を出発点として俳句が原爆被害の様相を現物として場に留める（留めていた）原爆遺構・浦上天主堂をどのように対象化し、人々はそのような俳句をどう受容してきたのかを多角的に明らかにすることである。

まず『残鐘』の後記や秋櫻子による自句自解、九州旅行の回想録を辿って秋櫻子が原爆を俳句に詠むことをどのように捉えていたのかを検討した。秋櫻子は南蛮文化への憧憬に基づいた歴史ツーリズムとして長崎を訪れたが、浦上の原爆被害を南蛮文化と同じようには受容できなかった。その影響が句集名『残鐘』や句作の過程に現れていることを明らかにした。この影響によって、秋櫻子と俳人・山口青邨の間には「残鐘」という語の捉え方に齟齬が生じていることも指摘した。

秋櫻子は被爆被害に苦しむ人々の表象を避けた。このため「麦秋の中なるが悲し聖廢墟」において浦上天主堂を示す「聖廢墟」という語は秋櫻子の理想とする芸術的な美しさを凝縮した言葉として読解されてきた。発表では、このような背景を持つ「聖廢墟」という語が、その後の俳句にどう受容されていたのかを検討した。「聖廢墟」を使用した句は原爆俳句アンソロジー『句集長崎』（平和教育研究集会事務局、一九五五）で見られるが、一方で同じく原爆俳句アンソロジーである『句集広島』（句集広島刊行会編、近藤書店、一九五五）には出現していない。このことから「聖廢墟」は長崎の原爆被害を詠む際の特徴語といえる。『句集長崎』のうち「聖廢墟」を用いている句の多くは、秋櫻子の浦上天主堂の捉え方をそのまま転用することで成立している。俳句は一七音、五七五のリズムを基本とする定型詩である。俳句の形式が「聖廢墟」のような季語以外の印象深い言葉の使用を促進する一方、言葉を相対化する作用は少ないことを問題提起した。

◇研究発表2

戦後国語教科書における〈原爆文学〉

——中学校用教科書をめぐって——

堀本嘉子

二〇二二年四月から中学校では新学習指導要領の全面实施、新教科書の使用が始まった。国語科における中学校用検定教科書の発行者は前回（二〇一六年度）の五社から東京書籍・三省堂・教育出版・光村図書（四社十二点となり、戦争・原爆に関わる教材は全ての教科書会社、学年に掲載されている。うち、原爆を扱っているテキストは五点である）。

教育現場では戦争・原爆文学の教科書掲載や平和教育運動を背景に一九八〇年代から一九九〇年代前半にかけて「原爆文学」を「平和教育」の学習材として享受していく一つの方向性があった。しかし、教科書や指導書の記述を見ていくと掲載当初に文学作品を読解していく指導法が取られていた教材も、時を経るに連れ原爆を学ぶ一つの「情報」として扱うような変化が見られた。一方で、かつて文豪の近影や生家の写真が採用されていた教科書巻頭のグラビアページに広島平和記念公園や長崎の平和祈念像が違和感なく掲載されていくことから原爆に関するテキストが教科書の中で重要であると示されてきたことが窺える。

発表後半では現行の中学校用国語教科書を発行している四社の教材変遷と指導法を追うことで原爆を扱ったテキストが一つの「情報」として処理されていくことや簡単に「共感する」「わかる」ことによる危うさや失われるものについて考察した。発表の終盤に教育出版の中学三年生用教科書に掲載されている梯久美子『薔薇のボタン』を取り上げた。このエッセイの結末部では、広島で被爆した少女たちの遺品であるブラウスに残された薔薇のボタンによって被爆前の少女たちの生活が想像さ

れ、遺品の所有者は自分たちに近いものだとして現代を生きる女たちが共感をもつ様子が描かれる。ここでは被爆する前の被爆者と自分たちの共通点を見つかることで、かつては他人の体験であったヒロシマを人事としてではなく自分の問題として受け止め「わかることができる」ような易しい回路が提示されている。この易しさが招く課題についても言及をした。

当日は発表者の力不足により発表資料に抜けがあったこと、また全体の流れを確認することに気を取られ論を焦点化することができず雑多な内容となったことをお詫びしたい。その都度チャットや質疑で補っていたただいた皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

彙報

第六四回原爆文学研究会

○日時 二〇二二年九月一八日(土) オンラインにて開催

○「原爆文学」再読8—大江健三郎『ヒロシマ・ノート』

大江健三郎『ヒロシマ・ノート』再読のためのノート

楠田剛士

大江健三郎の「ヒロシマ」を語るスタイル

—『ヒロシマ・ノート』から『ヒロシマの生命の木』へ—

高橋由貴

『ヒロシマ・ノート』を読み直すために—外在的要素に注目して—

山本昭宏

○研究発表

俳句における原爆遺構—長崎・浦上原爆を中心に—

樫本由貴

戦後国語教科書における〈原爆文学〉

—中学校用教科書をめぐって—

堀本嘉子

編集後記

原爆文学研究会も二〇年目を迎え、まもなく第一期が終了します。活動としては、第六五回研究会の開催、そして『原爆文学研究』第二〇号の刊行を残すのみとなりました。会はもちろん、新しい形で存続していくことになりましたが、一月二五日の研究会では、「原爆文学研究会の20年を振り返る」と題した座談会も企画されていて、これまでに研究会で成し遂げたこと、残された課題などが話題になると思われます。詳細は研究会ホームページにあります。対面と遠隔(ズーム)のハイブリッド形式で開催しますので、ぜひご参加下さい。

今回は、巻頭エッセイをアン・シェリフさんに書いていただきました。お忙しい中、本当にありがとうございました。被爆くすの木2世の成長と共に会も歩んで来たのだと、あらためて実感しました。発足当時から会に関わっている者として、感慨深いものがあります。

(野坂昭雄)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四—〇一八〇 福岡市城南区七隈八一—一九一一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel 092-871-6631 (代表)

URL <http://www.genbunken.net/>